

2021年10月28日

日本イーライリリー株式会社

〒651-0086
神戸市中央区磯上通 5-1-28
www.lilly.co.jp

EL21-58

～ 11月14日は「世界糖尿病デー」～ 第19回「リリー インスリン 50年賞」14名を顕彰 インスリン発見100周年、インスリン治療を50年以上継続している受賞者へ

日本イーライリリー株式会社(本社:兵庫県神戸市、代表取締役社長:シモーネ・トムセン、以下、日本イーライリリー)は、インスリン治療を50年以上継続されている糖尿病と共に歩む人々に敬意を表し顕彰する、第19回「リリー インスリン 50年賞」を14名の受賞者に贈りました。

インスリンは、現在からちょうど100年前の1921年にカナダ人医師により発見されました。発見の翌年には製剤化が成功し、1923年には世界で初めてインスリン製剤が一般販売されました。

「リリー インスリン 50年賞」は、そのインスリンの発見から1世紀が経つ糖尿病治療の進歩の道のりのうち、半分にあたる50年以上にわたリインスリンによる治療を継続している方を対象としています。受賞者の皆さんには、その道のりを振り返りながら、ご家族や医療従事者など周囲の方々への想いや、他の糖尿病と共に歩む人々への励ましのメッセージなどをいただきました。

日本イーライリリーでは、昨年に引き続き新型コロナウイルス感染拡大防止に配慮し、通院のタイミングに合わせて各ご施設でお祝いをして頂けるように、表彰サポートセットをご用意しています。また、受賞者の皆さんにはご本人のお名前を刻印したトロフィーをお贈りしています。

<院内表彰サポートセット>



<記念品:トロフィー>



日本イーライリリーの代表取締役社長 シモーネ・トムセンは次のようにコメントしています。
「インスリン発見から100年という節目の年に、50年以上インスリン治療を続けられている皆様にこのような賞をお届けできることを大変光栄に思います。また、受賞者の皆様の長い治療継続のご努力に心から敬意を表します。世界で初めてインスリンを一般販売した企業の日本法人として、今後も糖尿病と共に生きる一人ひとりに寄り添い、継続的なサポートを提供してまいります。」

以上

「リリー インスリン50年賞」とは

インスリン治療を50年以上継続されている糖尿病と共に歩む人々の長年のご努力を称えることを目的に、1974年に米国で始まりました。日本では2003年に表彰を開始し、第19回を迎えた本年度を含めてこれまでに198名が同賞を受賞されています。

日本イーライリリーは、「リリー インスリン 50 年賞」を受賞された方々が、インスリン治療を継続する全ての糖尿病と共に歩む人々に勇気と希望を与え、治療に前向きに取り組む上での目標となることを願っています。

第19回「リリー インスリン 50 年賞」受賞者プロフィール

※報道関係者様への情報公開のご了承をいただいた10名を50音順でご紹介します。

※受賞者プロフィールの内容は、個人としての見解です。

◆K. I 様（インスリン治療歴 51 年 / 1 型糖尿病 / 1969 年生まれ / 東京都在住）

発症は1歳2ヶ月でしたので、何も覚えておりません。最初は風邪のような症状だったけれど、なかなか回復しなかったとか。病名を聞いた母はショックだったと思います。若いころは目立つことが大好きで、1型糖尿病のミスアメリカの存在を知り、私も同じように病気の人達の励みになりたいと芸能界へ。多少活躍しましたが、すぐに引退。それからは、企業の総合受付をメインに、フラダンスのインストラクター、ネイルのインストラクターなど、好きなことを仕事にしてきました。コロナ禍になってからは韓国ドラマに夢中になっていて、終息したら韓国に行きたい、そして韓国人のお友達も作りたいなと思っています。

現在の HbA1c も優等生な数値ではありませんが、私はとにかくプラス思考。なんとかなるさ精神とインスリンのおかげで、50年間、とても幸せに暮らせています。



◆一瀬 諒則 様（インスリン治療歴 50 年 / 1 型糖尿病 / 1946 年生まれ / 長崎県在住）

とても喉が乾いて水分摂取量が増え、夜中や仕事中等、昼夜を問わず頻尿になりました。造船の内装に携わっていましたが、作業に支障が出て困ることが増えました。発症したのは23歳の時です。そのころのインスリン治療は、ガラスの注射器と針を鍋で沸かした熱湯の中で消毒し、何度も使用するのが当たり前。治療当初から自分自身で注射も行いました。造船の仕事は転勤が多く、慣れない場所で仕事をして何度も低血糖になったので、飴玉を常に持ち歩いていました。仕事を引退した後も、やはり水辺の風景が落ち着くのか、趣味は魚釣り。釣った魚をおろして調理するのは、妻より上達したかもしれませぬ。

自分に合ったインスリン治療はもちろん、食事の量やバランスを調整し、無理なくできる運動を見つけて、それらを長く継続することが大事だと思います。



◆柿沼 みやと 様（インスリン治療歴 56 年 / 病型不明 / 1926 年生まれ / 茨城県在住）

同じ糖尿病で主人を亡くしていたので、自分が発症した時には「ついに私の番か」と思ったと同時に、二人の子どものために生き抜くことを決意。いつしかインスリンは日常の暮らしと馴染み、日本列島を漫遊して過ごした後半の人生と仲良く共存しているような感覚でした。患者の意見を聞いてくださる主治医の先生は、とても人間味があり信頼できるお方です。5年前からスポーツジムに通い、娘やコーチの補助のもとマシンを使ったトレーニングを継続しています。体力を維持し、コロナが完全に終息したらすぐインスリン片手に飛行機にとび乗って、家族と一緒に至福のホテル時間を過ごしたいと思っています。

これから治療を始める人は、痛くても辛くても、やるべきことを怠らずにやり通してほしい。やった者はきっと救われます。勝者同士で祝杯をあげましょう。



◆佐藤 莊助 様（インスリン治療歴 56 年 / 1 型糖尿病 / 1947 年生まれ / 東京都在住）

18歳で診断された当初、不適切な処置によって一時は昏睡状態に。転院先で目覚めた時には体重が15キロほど減っていて、2週間ほど車椅子生活を送りました。当時の先生から聞いた「糖尿病の治療は、食事、運動、インスリン療法が基本です」という教えを守り、階段の上り下りを日課にしたところ、そのおかげで容態が安定。仕事に就いてからも散歩を中心に、マラソン、スキー、テニスやゴルフにも励みました。現在、毎日の朝食後に1時間の散歩を心掛けていますが、朝食前の血糖値が高い場合には、散歩の時間を延ばして運動療



法で調整しています。HbA1cは6.4%前後を維持しており、主治医から「よく頑張っていますね」と褒めていただくのが何よりの喜びです。

若いころは暴飲暴食をしたこともありましたが、状況を受け入れ基本の治療を継続すれば、合併症が進行することはありませんでした。継続は力なりです。

◆杉本 裕子 様（インスリン治療歴 51 年 / 1 型糖尿病 / 1970 年生まれ / 東京都在住）

発症は生後 11 ヶ月、生まれて間もなくです。主治医にとっても乳児の糖尿病は初めてで、治療も必死だったと聞いています。ここまで生きてこられたのは発見してくださった先生のおかげ、私の命の恩人です。幼いころはずっと、インスリン注射は特別なものではなく、みんなもしているものだと思っていました。糖尿病についてきちんと理解したのは、1 型糖尿病の子どもを対象にしたサマーキャンプに参加した小学生の時。自分で注射ができるようになり、治療法などの知識も増えていきました。食事で体質改善をすれば、調子が良くなり、楽に生活できる実感がありますので、日々の食べ物に気を配り頑張っています。

一日 1 回の注射だった時は調整が大変でよく倒れていましたが、複数になった今は大丈夫。失敗から学び、その場で対応できる力をつけることが大切です。

◆辻 洋美 様（インスリン治療歴 51 年 / 1 型糖尿病 / 1966 年生まれ / 三重県在住）

診断されたのはわずか 4 歳、注射器の大きさにびっくりした事は覚えています、その後は意識を失い意識が戻ったのは父親の話では 3 日後でした。学校の友達や先生は病状を理解してくれて、充実した学校生活を送りました。現在の主治医の先生は、私の声に耳を傾けてくださる特別な存在。HbA1c が 13%以上から 6%台まで下がったのは先生のおかげです。去年からクラシックギターを習い始め、元気なうちにバイクにも乗りたい。コントロールを続けて楽しみを見つけていきたいです。これまでの 51 年を振り返ると、今、こうして元気でいられるのは家族、友人、お世話になったたくさんの方、看護師さん、栄養士さん、それ以外のたくさんの方々に助けていただいたから。特に両親がどれほど私のために尽くして愛情を注いでくれたのかを考えると、感謝の気持ちは言葉では言い表せません。そして、こんな貴重な体験が出来たことにも感謝です。今回の受賞で、何よりも皆さんに感謝の気持ちを伝えたいです。

周囲にわかってほしい場面は多々あると思いますが、「当事者にしかわからないもの」と日頃から思っていると、案外落ち込むことがないように思います。



◆戸川 まり子 様（インスリン治療歴 54 年 / 1 型糖尿病 / 1948 年生まれ / 福岡県在住）

幼少時は健康そのものだったのに、19 歳で突然発症。母は姉には心配だと話していたようですが、私には「頑張らにゃ、しょうがないたい！」と力強い口調で言ってくれたことを忘れません。23 歳で看護師になった際、最初に糖尿病であること、インスリン使用のこともすべて勤務先に報告しました。28 歳で結婚し、孫も生まれ、定年まで仕事もできて幸せです。朝の習慣として、血糖の動きに合わせたインスリン調節と、主人と一緒に 1 万歩ほど歩くことを続けています。主治医の先生からの「低血糖を起こすと認知症が早まることがあります。一緒に頑張りましょう」という言葉を胸に、これからも頑張りたいと思っています。

発症から眼底出血を含む合併症はありませんでしたし、国内外のあちこちを旅しました。気持ちさえ病に負けなければ、どんなことも可能なのだと思います。



◆平石 厚子 様（インスリン治療歴 51 年 / 2 型糖尿病 / 1954 年生まれ / 東京都在住）

高校生で発病しましたが、その時すでに母も糖尿病。インスリン治療を知っていたので「自分に合う量を補えばいいんだ」と、違和感なく治療を受け入れたように思います。そこから、母と私に注射するのは父の役目に。面倒がらず毎朝行ってくれた父に感謝の思いで一杯です。高校のクラブ合宿では、友人たちが「もう注射した？」と気遣ってくれ、楽しい思い出もたくさんできました。短大卒業後の保育園勤めでも同僚に打ち明け、協力を得ました。保育士時代からの主治医は決して厳しいことはおっしゃらず、患者が病気と向き合えるよう笑みを浮かべて見守ってくださる方。とても話しやすく信頼できる唯一の先生です。

腎臓瘍、乳がん、胃がんと何度も手術を経験しましたが、医学の進歩を信じて、一日一日を大切に過ごしてきました。なんでも話せる仲間や家族を大切に。



◆平原 智織 様 (インスリン治療歴 50 年 / 1 型糖尿病 / 1954 年生まれ / 埼玉県在住)

高校 2 年生で発症した時、不安でたまりませんでした。「糖尿病のインスリン治療は、近眼の人が眼鏡をかけるのと同じ」と当時の先生が説明してくださり、前向きに考えられるようになりました。高校時代は友人全員が病気のことを知っていたので、低血糖になっても遠慮なく補食できましたし、大学でも信頼できる友人には話して、いろんな場面で助けてもらいました。現在の主治医とは娘を妊娠した時からの付き合い。どんな時も私を励まし、最良の治療をしてくださいました。現在、塾の仕事に孫の世話にと、忙しく毎日をごさせているのは主治医の先生のおかげです。言葉に言い尽くせないほど感謝しています。一日数回の注射を面倒に感じるかもしれませんが、そのうち生活の一部になります。インスリン注射さえあれば健康に暮らせる、それって幸せなことです。

◆N.Y 様 (インスリン治療歴 51 年 / 1 型糖尿病 / 1967 年生まれ / 福岡県在住)

2 歳半で発症した時、小児患者への理解がない逆境に屈することなく「どうか検査してほしい」と病院で土下座してくれた両親、それに応えてくださった先生に感謝しています。職場で知り合った夫は遠距離ドライバーで、1~2 週間不在にすることも多く、夜中に低血糖が起きないか心配のようです。低血糖で諦めたこともありましたが、気づけたこともたくさんある。朝目覚められなかった日は「お昼になったけれど、起きられて嬉しい」。一日の終わりは「無事に過ごせてよかった」と命のありがたさを実感します。10 年ほど前からタロットの勉強をしていて、いつか人の悩みに寄り添える仕事をしたいと思っています。主治医の先生から「普通になんでも食べて良いですよ」と助言いただいて楽になりました。食べたい時は調整して打てばいいだけ、と思えば心が軽くなります。



世界糖尿病デーとは

拡大を続ける糖尿病の脅威を踏まえ、2006 年 12 月 20 日、国連は国連総会で、国際糖尿病連合 (IDF) が要請してきた「糖尿病の全世界的脅威を認知する決議」を加盟 192 カ国の全会一致で可決しました。同時に、従来、IDF ならびに世界保健機関 (WHO) が定めていた 11 月 14 日を「世界糖尿病デー」として指定しました。IDF は決議に先駆け、「Unite for Diabetes」(糖尿病との闘いのため団結せよ) というキャッチフレーズと、国連や空を表す「ブルー」と、団結を表す「輪」を使用したシンボルマークを採用。全世界での糖尿病抑制に向けたキャンペーンを推進しています。

(出典: World Diabetes Day Committee in Japan https://www.wddj.jp/01_howto.htm)

日本イーライリリーは、世界糖尿病デーに関する世界的な取り組みの一環として、神戸本社を11月11日から11月14日まで、世界糖尿病啓発のシンボルカラーである青色にライトアップします。

日本イーライリリー株式会社について

日本イーライリリー株式会社は、米国イーライリリー・アンド・カンパニーの日本法人です。人々がより長く、より健康で、充実した生活を実現できるよう、革新的な医薬品の開発・製造・輸入・販売を通じ、がん、糖尿病、筋骨格系疾患、中枢神経系疾患、自己免疫疾患、成長障害、疼痛、などの領域で日本の医療に貢献しています。

詳細はウェブサイトをご覧ください。 <https://www.lilly.co.jp>

糖尿病事業について

日本イーライリリー株式会社は、糖尿病のトータル治療を提供するリーディングカンパニーとして、画期的な糖尿病治療薬の研究、開発および情報提供活動に尽力していくとともに、「リリー インスリン 50 年賞」をはじめとしたサポート活動を通じ、糖尿病と共に生活をされている方々に寄り添い貢献してまいります。